

駒の館だより

明治鍼灸大学図書館報

第 8 号

平成元年3月25日 発行

明治鍼灸大学附属図書館

〒629-03 京都府船井郡日吉町
TEL. 07717-2-1181 (代)

図書館のより充実を

学 長 水 越 治

「図書館」という字を見慣れているため、何等の違和感をもつわけでないが、つくづく見直してみるとこの文字は随分古臭い言葉のようにも思える。人類は言葉と文字を持つために知識を蓄え伝えることが出来た。そして今日の文明を築き、地球上の生物の支配者となり得た。文明は人類の知的遺産の蓄積によって成り立っている。学ぶことの始まりは、この先人の残した知的遺産を知ることから出発する。それは全て本によるのが通例であった。したがって、学問と教育の場においては十分な図書を常備することが何より大切であることは否定できない。

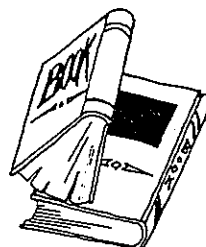
しかしこのような見方に、最近いささかの変動が起こっていることは確かである。つまり知的遺産の蓄積が加速度的に膨大な量になっていることに起因した現象である。情報量が増加しているとの表現も可能である。一人前の科学者になるためには、数十キロの重量の本を読めばよいといった人がある、しかし今日では数トンを超える量を読まないで優れた学者になれないともいわれている。そのようなことが可能であるのか。情報過剰の時代であるがために、玉石混同の文献を目に通すためにこのような量になるのかも知れない。ここにおいて能率化の問題が起こる。このとりわけ操作に「文献検索」なる新語が生まれ、新しい技術が必要になる。

先人の残した知的遺産には図書の概念を越えるものがある。例えば医療系の大学などでは、個々の患者の病歴やその統計などが知的財産と

して残されている。

さらに知的財産を学ぶことは必ずしも本を読むこととは限らない。録音されたテープを聴くこともあろうし、スライドやビデオを見ることを加えて聴覚と視覚の両者から学ぶことは大脳の記憶システムに情報知識をインプットするに能率がよい。

大学の図書館には、それぞれの大学に特有の歴史的資料などの保在も必要である。なにもかも総合してみると、やはり「図書館」という名称は古いのではないかと思う。世の中には、言葉に示される概念が時代とともに次第に変化して、異なった概念を意味することは少なくない。「図書館」は今では「情報資料館」というのがよりふさわしい。大学の図書館は従来の習慣から、一定数の図書を常備すべきことが課せられている。しかし時代の要求は異質の新しい機能も求められているわけで、このような様々なことを念頭におきながら本学の図書館が充実されていくことを念じている。



私の体験

附属病院長 福田正邦

終戦後、大学に入学し、大学の最終学年の頃より、胃部の不快感、吐気などが時々あり、レントゲンで診断を受けたが、何時も異常なしとの事で、対症的に治療しておった。

昭和31年、大学付属病院産婦人科に勤務していた暑い夏の日、朝から気分がすぐれず、勤務を休んで床についていたが、何度もトイレに行き度くなり、その度に目まいがして、体がふらふらするので、おかしいと思っていたが、昼近くに、“うどん”を一口食べると、はげしい吐吐がおこり、何とも云えない不快感と胸内苦悶で目の前が急に暗くなり、ついで逆に今度は目の前がパッと明るくかがやいて何とも云えないよい気分となる。

耳元で父の「もう駄目だ」と言う声に、目をあけると皆が集まっていた。

あとで聞くと、多量の吐血と下血がおこり、出血性ショックを起こして倒れたとの事である。

恐らく短時間、死に直面したと今でも思っている。意識がもどってからは、胃部に冷電法、大腿皮内にリンゲル注射、3日間絶対安静、絶食、3日後よりおも湯より始まる食事療法で徐々に体内が回復し、約1ヶ月後には、まだ青い顔をして、ふらつきながら勤務にもどった。尚、回復後最初の排便時の苦痛、及び貧血により長くつづいた頭痛はいまだに忘れられない。

大学に出勤して、レントゲンを写してもらい、十二指腸潰瘍からの出血であったことがわかった。

もし、私が今この状態になれば、直ちにき救急車で病院に運ばれ、輸液等の応急処置と同時に、各種検査が施行され、輸血施行、状態の改善と共に、内視鏡検査、その結果治療を内科的にするか、外科的にするか決定され、もっと早く回復したであろうと思う。

当時と現在では、潰瘍に対する診断方法、治療方法も異なっており、内視鏡の出現による内科の進歩はめざましく、潰瘍は外科的手術が主

であったのが、今は、有効な治療薬も出現し、内科的に先づ治療を行うようになっている。

私が夏の日に体験した出来事より三十数年が経過した今日、医療に関する色々の分野の躍進は目ざましいものがある。

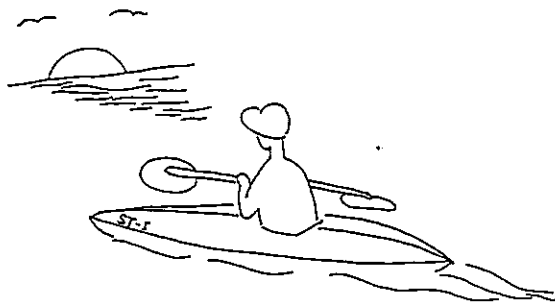
医学書にしても、医療分野の細分化により、多数の専門の先生方が執筆された立派な本が書店の棚にずらりと並んでおり、勉強するのにどれを選ぶか迷う様な状態である。

医療機器も次々に新しいものが考案され、しかも、それが更に機能アップされ、コンパクトになって来ており、使いこなす為の努力も大変である。

今后21世紀に向けて、診断、治療、予防等は更に躍進が期待される。

私達医療に従事するものは、常に学ぶ心を忘れず、その時の医療水準を保つ様に研修をつみ重ねなければならないと思う。

「駒の館だより」に投稿してほしいとの依頼をうけ、近頃時々胃の調子がおかしくなるので、ふと死にそうになった体験を思い出し、その当時の医療と現在の医療を比較して考えた時、今の医療が実にすばらしく、その恩恵をうける幸せをしみじみと痛感する次第です。



生みの苦しみを味わって解った著者の苦勞

東洋医学教室 松 本 勅

“時間のある時は本がない・本がある時は時間がない”

図書館というとは私はいつも小学生の頃の図書館を思い出す。私の育ったのは信州の片田舎だったので近くに本屋もなかったが（勿論、昔のことで、買うための小遣いもあまりなかったが）、学校の図書館は町も田舎も同じだったらしく沢山の本があったので、よく借りて読んだことを覚えている。中学生のときも文学全集を借りて読むのが楽しみだった。

しかし、最近では忙しさのため、小説類を読むということは旅行に出た車中ぐらいで、殆ど機会がなくなってしまっている。また一般雑誌やテレビで社会常識を仕入れる時間もなかなかとれないので、やはり同じように旅行中に雑誌などを買い求めるしかない。レクリエーションについて、“時間のある時には金がない、金がある時には時間がない”とよく云われるが、金を本に置き換えても一致する言葉だと思う。最近では文献に目を通す時間もままならなくなってきている。

“膨大な情報量との闘い”

間島副学長が以前に、年々膨大な量の文献が作られており、これをいかにうまく使いこなすかが今後の大きな課題であることを述べておられたが、我々にとって本当に大きな問題だと痛感している。また、「若い、勉強のできる時間のある間に勉強をしておけ」とか「段々と責任のある立場になると本を読む時間もなくなるから、若いうちに本を読んでおけ」などと上の人によく言われたが、時間のなくなったことをつくづく実感している昨今である。情報量の増大と時間の不足で悩んでいるのは私だけではないであろう。特に英文などはタイトルに惹かれて苦勞して訳しても、自分の求めている内容と違いガッカリすることがよくある。そこで、この頃ではいかにしたら論文の内容を短時間で把握

できるかを真剣に考えている。とは言ってもなかなか簡単な方法は見つけだせないが、ともかく、最初に要旨（summary）の特に結論のところを見て使えそうかを判断し、さらに結果のところの図表やディスカッションのところの結論などを拾い読みしながら、全文を読むかどうかを決めるようにして、はかない抵抗を試みているのが現状である。皆さんがなさっている良い方法があったら教えて頂きたいものである。

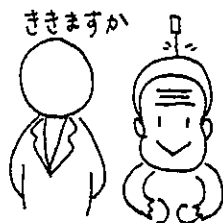
“生みの苦しみを味わってわかった著者の苦勞”

さて話は変わるが、いろいろな論文や著書を読むことは、内容はもとより文章のまとめ方、構成、表現方法などの勉強のうえで大いに参考になるものである。同じことを言おうとしても色々な表現の仕方があり、文章をちょっと変えるだけで内容が理解し易くなったり、逆に理解しにくくなったりするものである。私などまだまだ未熟であるので、他人の文章は大変勉強になる。

ところで、私は今まで論文は書いてきたが、著書は共著で一部を分担して書かせて頂いたぐらいで単著の経験はなかった。しかし、この2月に初めての単著である『現代鍼灸臨床の実際』（医歯薬出版）を出版する機会を得た。原稿用紙約1000枚、図表500枚を約3年かけて、夜にワープロに向かってコツコツと書き上げてきたが、前に進んでから後ろを見直すと文章を変えたほうがよいと思われ訂正するということが多々あり、遅々として進まず、いつになったら終わるのやらと焦り、嘆き、まさに悪戦苦闘の連続だった。

他人の本を読むのは気楽であり、「ここはこうした方がよい、ああした方がよい」と批評することは簡単であるが、書く方にしてみれば一言一言、一行一行に神経を集中して書き進めることは大変なエネルギーを必要とすることがよく分かった。貴重な体験をさせてもらったので、

今後は著者の苦勞を考えながら今までとは違った目で興味深く読めるのではないかと思っている次第である。



音楽雑感

内科学教室 梶山静夫

音楽の洪水

最近の音楽の状況は、まさに音楽の洪水である。我々は、朝起きて、夜寝るまで一体何種類の音楽に浸らされているのだろうか。

我々の周りには、音楽が充ち満ちている。なかには、朝に生まれ夕べに消えていくのもあれば、これとは別に何十年、何百年と時の試練を経て生き残った音楽も存在している。人類の遺産として、未来に伝承され、名曲と言われ続け、人々に長い間愛され続けて来た曲は数限りないほどある。難しい曲、易しい曲、大曲、小品など。そんな曲はすごくいい思い出となっている。

クラシック音楽ブーム

“クラシック音楽ブーム”と人は言う。それは外れていないかも知れない。だが、ほんとうにそうなのだろうか。我々を取り巻く状況に変化があったのだろうか。確かに身近な変化は、我々が毎日つき合っているテレビの世界で起きている。

音楽のジャンルのなかでも食わずぎらいの代表、クラシック音楽がテレビのCFに氾濫している時代である。

映画を聴く楽しみ

フランシス・コッポラの“地獄の黙示録”にワーグナーの＜ワルキューレの騎行＞、クロード・ルルーシュの“愛と哀しみのポレロ”にはラヴェルの＜ポレロ＞が。

この二本の映画の音楽的アピールの強烈さが話題になって、そのワーグナーやラヴェルが異常なほどのもてぶりをみせて、ついにテレビのCFにまで登場している。

最近、映画には実にさまざまなクラシック

音楽が使われるようになり、これまでクラシックに興味がなかった映画ファンが、ワーグナーやラヴェルに振り向くようになってクラシック・ファンになったという人たちは、恐らく想像以上に多いに違いない。

心身のリフレッシュに

最近では、ニューメディアがどんどん出現し、映像も音も高いレベルで楽しめるようになった。絵の出るレコード、レーザーディスクには映画からクラシック音楽まで揃っているし、すばらしいデジタル・サウンドが聴けるコンパクトディスクもあらゆるジャンルの音楽が揃っている。

このように、さまざまな音楽や音が、それぞれそぞわめきのように家庭に、街中にあふれている。映像は、眼をつぶれば遮断できるが、音は否応無しに耳に入って来る。

美しいメロディーを耳にすると、誰しものが安らぎを覚えるのはなぜだろう。これは、音楽によって心の緊張も身体の緊張も和らげられるからで、それだけに心地よい音や音楽は我々の暮らしにますます意味をもって来る。

美しいメロディーが人の心を大きく揺り動かす感動させる力を持っているのは、心身が安らぎを得ることと大きく係っているからで、シューベルト、ベートーヴェン、モーツァルトなど数々のクラシックの名曲で大いに心身をリフレッシュすることである。

最近のクラシックへの関心の高まりは、日常生活におけるストレスへの一種の心安まる安定剤となることも“クラシック音楽ブーム”の一因ではないかと思われる。

すてきな演奏会を

日本全国総グルメ時代とか、美味しい食べ物を求めて全国、世界を巡っている時代である。

曲にもボリュームたっぷりでおっぱい味の曲から、あっさりした曲まで非常にバラエティが豊かである。そして、それを食べさせてくれるお店が演奏会であり、レコード、CDなどのオーディオ設備であるのだが、その演奏会の数の方にはびっくりさせられる。そして、その食べ物を料理（演奏）してくれるのがコックさん（演奏者）である。コックさんの腕次第で、そのグルメは美味しくもなり、まずくもなるというわけである。

美味しい食べ物（すばらしい曲）を、すばらしいムードのある店（すばらしいホール）で、名コック（名演奏者）の腕のもとで食べる（聴ける）ことができれば、とてもすてきだと思っています。



文献検索と研究の関連について

東洋医学教室 佐々木 和 郎

文献検索と研究との関連について、自分の経験と以前読んだ本をもとに私見をのべてみたい。

今から8年前、こちらの大学にくる前、研究室の仲間3人と毎週土曜日、東大医学部図書館に行って文献検索を行おうと決め、午前9時半、図書館集合、遅れたら一番遅れたものが文献検索後、喫茶店でコーヒー一杯全員におごる、という有り難くない条件で図書館にだぶ足を運んだことがある。最初は手当たりしだい図書館の雑誌に目を通し、後に医学中央雑誌（医学文献の妙録誌）の中の東洋医学の項目を過去十年間どの様な文献が出ているか調べ、興味ある文献を情報カードに抜き書きしてみた。これを行なって解ったことは、鍼灸の研究が今どこで行われ、どのような研究が多いかだいたい理解できたことである。さらに鍼灸関係以外の医学雑誌に目を通すことにより、それから新たな発想が出て、今はできなくても、将来このような研究がしたいと思うようなものが色々でてきた。こう書くと文献研究をどんどんしろということになると思うが、そう簡単にはいかないと、この頃考えている。これには時期があると思う。できるならば学生時代に行っていた方が良い。研究ができるような時期、機会が与えられていれば研究に打ち込むべきものと思う。なぜなら、

これは多くの研究者が言っていることであるが、研究するたびにあまり文献ばかり読むと文献に足を引っ張られることになり、新しい発想ができにくく、どうしても後追い型の研究になると思うからである。

特に鍼灸医学は臨床から出発したものであり、それを当時の哲学思想を基に体系づけたものである。そうであるならば、特に鍼灸の研究では臨床で観察される事実が一番重要であり事実には忠実であることが一番大切である。

宗像 英二の創造の思考と技術という本の中かで実物教育の尊重ということが書かれている。「わが国では、明治開国以来、先進国に学ぶことが大いに奨励され、これが国力の増進に大貢献した。科学技術の面でも先進国に学ぶことが重視され、その水準に達すれば一応よしとされていたようである。このような環境のなかで、勉強家である日本の科学者は、文献などを通じて、出来上がった科学技術を学ぶのに力をだすすぎたきらいがある。その結果であろうか、既知の知識から独立してさらに一步をすすめる気力・機会を失い、独自なものを創造することに及ばなかったのである。一方、先進諸国の科学技術開拓者らは、文献などはまだ存在しない領域を事実によって教えられ探究した。これは既

存の知識として学んだものと、実在の事実が教示するものとの間に矛盾を見だし、事実、すなわち自ら観察した結果を確信して、文献にのみ依存することから独立したものである。文献は既知の知識を記したものであって、過去に限定されている。一方、事実には、既知の他に未知のものも含まれており、将来に向けて無限に広がっている。したがって科学技術では、文献教育よりも実物教育を重視すべきことは明白である。」さらに「準備のための学修時代には、文献教育もよろしかろう。しかし、自分の道を開こうと決心して独立した暁には、もっぱら実

物に教えをうかがい、事実の深遠な教導のもとに、独創的成果をあげるように努めなくてはならない。」と述べている。

我々は鍼灸医学の科学技術開拓者にならなければならない必要なものは、鍼灸医学の古典として学んだしっかりした既存の知識と、実在の事実が教示するものとの間に矛盾があれば、それを見いだすことである。事実、すなわち自ら観察した結果を確信して鍼灸医学の古典に依存することから独立した時に、鍼灸医学の真の発展があると思う。

西洋図書館小史 (その八)

附属図書館 八木克彦

(承前)

これまで、大英博物館図書館について述べてきましたが、実は、この図書館は現在では大英図書館 (The British Library) 傘下の参考部門の一つとなっております。

大英図書館は国立図書館構想に基づいて、1972年に創立されたもので、参考部門として前記の博物館図書館の他に科学参考図書館 (The British Library Reference Science Library) があり、貸出部門としてヨークシャー州ボストンの旧国立科学技術貸出図書館 (National Lending Library for Science and Technology) と全国中央図書館 (略称 NCL)、それに書誌センターとしてイギリス全国書誌 (略称 BNB) の五館が組織されており、それぞれ収集・参考業務・貸出・書誌の諸機能を分担しております。

科学参考図書館は1973年迄は国立科学発明図書館として知られており、科学・工業技術・発明・特許関係の資料を広く網羅して、その所蔵は Holborn 並に Bayswater の分館を含めて図書80万冊、雑誌3万4千種、特許関係の資料15百万件に達しております。また、貸出図書館 (略称 BLLD) は全国中央図書館と国立科学技術貸出図書館を合併したもので、60エーカーの敷地の一部に建物があって、書棚の延長

は72マイルに及び、230万冊の図書と百万以上のマイクロフォーム化された資料を所有して、国内外の諸機関へ貸出或は文献複写サービスを行っております。

さて、次に話をもとに戻して、イギリスにおける公共図書館の発生について見てゆきたいと思います。

イギリスにおいて一般庶民のための図書館が出来たのは17～18世紀の所謂マニュファクチュア (工場制手工業) 時代でした。このころ生産・貿易・交通等の発達に伴い庶民層にも読み書き算数の必要性が高まって、各地にグラマースクールや慈善学校等の初等教育機関が設けられ、また宗教団体も教区図書館や日曜学校の増設に力を入れ、17世紀初頭には Coventry をはじめ幾つかの産業都市に都市図書館が生まれました。

当時、上流階級のサロンに対応するものとして中流男性達の溜り場となっていたのはコーヒーハウスでしたが、このコーヒーハウスに新聞が置かれるようになったのは17世紀後半です。その頃、新聞・雑誌には重税がかけられ高価なものでしたが、多数のコーヒーハウスを通じて回覧されて新しい情報が速かに一般庶民の間に行き渡るようになりました。

通俗的な読みものについては貸本屋 (Circulating Library) が供給し、辺鄙な土地には巡回図書館 (Itinerating Library) が設けられ、また、小グループのブッククラブ、読書クラブ等が出来、なかには会員制図書館へと発展するものもありました。会員制図書館は会員の出資で基金をつくり貸出用の図書を購入、毎月一回程度の会合をもって情報交換をしていたようです。

会員制図書館は今日ではほとんど廃れてしまいましたが、カーライル (Thomas Carlyle 1795 ~ 1881) が、大英博物館図書館が館外貸出をしないことに腹を立てて創設した London Library のみは今日なお在続しております。

ご存じのように、イギリスでは 18 世紀後半から産業革命が興って漸次マニュファクチュア時代を脱し、機械による生産・工場工業へと移行するわけですが、労働力需要の増大に伴って従来の人口増加抑圧の観念や習慣が薄れるとともに、医学知識の普及によって人口が飛躍的に増加し、また、従来自主性をもって生産に従事していた中産的生産者階層が崩壊して大量の賃金労働者が出現することとなります。

機械による作業の単純化は労働者を常に解雇・失業の不安にさらし、また年少者による低賃金・長時間労働をもたらし、やがて多くの労働者は悲惨な生活を強いられて、街には貧民・浮浪者があふれることとなりました。

理想的 (或は空想的) 社会主義者と呼ばれるロバート・オーエン (Robert Owen 1771 ~ 1858) は、“人間の性格は環境によって決定される”として、自分の経営するニューラナークの紡績工場において、労働時間の短縮、生活必需品の原価支給、年少者の酷使禁止を行い、さらに町には労働者住宅、食堂、診療所、公園を

つくり、また労働者のための夜間学校「新学院」 (New Institution) を開設、図書館も併設して労働者の教育・生活水準の向上に努めました。

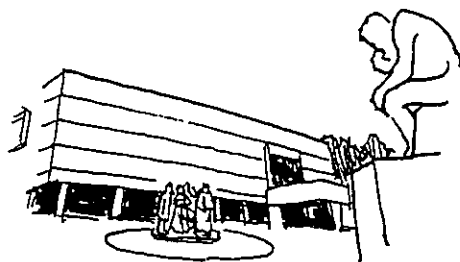
オーエンの影響を受けたグラスゴー大学の教授バーベック (George Berbeck 1776 ~ 1841) は労働者達に基礎的な機械学を教えるために「機械工クラス」を開き多くの受講者を集めました。これが労働者の自己教育運動の始まりとなり、やがて 1823 年には労働者自身が出資して「職工学校」 (Mechanic's Institute) を作り、翌年には「ロンドン職工学校」がバーベックを校長に迎えて開設されました。

これらの職工学校には当然のことながら図書館があり、生徒になるか或は少額の会費 (subscription) を支払うことによって利用できる仕組みになっておりました。職工学校は一時期 (1850 ~ 60 年頃)、イングランドだけで 600 校を数えましたが、1880 年代には衰退をはじめます。しかしながら、学校に付設された図書館の多くは、一般庶民の要望する通俗的な読みものや新聞・雑誌類を蔵書につけ加えることによって会員の離脱を防ぎ、後まで生き残って公共図書館の素地をつくったという次第です。

この間、イギリス議会は 1850 年に図書館法を通過させ、イングランドの人口 1 万以上の各都市に対し、税の一部を公共図書館建設のために充当する権限を与えました。

この図書館法に基づいて最初に公共図書館をつくったのはマンチェスター市で、その図書館は 1852 年に開館し、すぐれた運営により今日でも指導的な立場に立って活動しております。

その後、年を追って図書館法を採用する都市が増え、1877 年には図書館協会 (略称 L. A.) も創設されて、公共図書館の数は 1900 年には 300 館に達しました。



近着東洋医学系図書一覧 (和書)

(昭和63年1~12月収蔵分)

臓腑経絡詳解〔復刻版〕 1~5、 岡本一抱子 盛文堂 昭58	金匱要略解説 何任著 勝田正泰 監訳 東洋学術出版 昭63
有林福田方 有林 科学書院 昭62	中医診断学ノート 内田恵子 東洋学術出版 昭63
醫學三蔵辨解〔復刻版〕上、中、下、 岡本一抱子 撰 盛文堂 昭62	和刻 漢籍医書集成 6~10、12~13 小曾戸洋 他編 エンタプライズ 昭63
気・流れる身体 石田秀実 平河出版 昭62	求道と創造の漢方 村田恭介 東明社 昭60
黄帝内経と中国古代医学 丸山敏秋 東京美術 昭63	臨床鍼灸古典全書 1~6 篠原孝市 監 オリエンツ出版 昭63
構造造学の原理 基礎編 吉田勤持 エンタプライズ 昭62	中国古代養生思想の総合的研究 北出祥伸 編 平河出版 昭63
講談社 東洋医学大事典 大塚恭男 他編 講談社 昭63	経絡治療 鍼灸臨床入門 小野文恵 医道の日本社 昭63
東医内科学 金洛憲 現代出版プランニング 昭62	鍼灸医学序説 高島文一 思文閣 昭63
中医処方解説 神戸中医学研究会 医歯薬出版 昭61	入門 東洋医学の基礎と臨床 山下九三夫 他編著 マグプロス 昭54
薬草術 金善東画 久保徳監香匠庵 昭62	針灸学 上海中医学院 編 刊々堂 昭63
症状による 中医診断と治療 上、下、 趙金鐸 主編 神戸中医学研究会 編訳 燎原書店 昭62	運氣論入門 程紹恩 編著 谷口書店 昭63
医方集解の世界 張明澄 他 東明社 昭62	灸法の医典—黄帝明堂灸経の活用— 深谷伊三郎 谷口書店 昭63
傷寒論の世界 張明澄 他 東明社 昭62	針灸経穴名の解説 高式国 燎原書店 昭63
私の治療室から—経絡治療の治療集— 小里勝之 小里はり療院 昭55	臨床中医学概論 張瓏英 自然社 昭63
レーザー鍼と光灸療法 深澤 要 谷口書店 昭62	くらしに活かす 東洋医学入門 蓬の会 編著 エンタプライズ 昭63
脊柱モーション・パルベーション 中川貴雄 編著 科学新聞社 昭61	漢方による精神科治療 松橋俊夫 金剛出版 昭63
東洋医学論集—矢数道明先生退任記念— 大塚恭男 他編 医聖社 昭61	明趙開美本 傷寒論 北里研究所 編 燎原書店 昭63
針灸臨床の理論と実際 上、下、 天津中医学院 編 国書刊行会 昭63	清陳世傑本 金匱玉函経 北里研究所 編 燎原書店 昭63
かんたんツボ図鑑—川柳ですらすらわかる— 青柳修道 主婦の友社 昭62	元鄧珍本 金匱要略 北里研究所 編 燎原書店 昭63
東洋医学の時代—針灸のなぞに挑む— 代田文彦 編著 東京書籍 昭62	中医体質学入門 王琦、盛増秀 原著 谷口書店 昭63
漢方処方大成 矢数圭堂 監 自然社 昭63	免疫と漢方 駱和正 原著 谷口書店 昭63
実用処方便覧 矢数圭堂 監 自然社 昭63	戦争と鍼灸—ニカラグアのいのちの革命— 井上 真 現代企画室 昭63
新編 傷寒論・金匱要略総説 劔持久 講述 東明社 昭61	中国養生叢書 第1輯~第7輯 石田秀実 他 解説・谷口書店 昭63
三位一体 東洋医学シンクタンク 茂兼 仁 東明社 昭58	

あとがき

丹波の地にはめずらしく雪の少ない冬でした。炭酸ガス濃度の影響か、エル・ニーニョの所為か、などと考えているうちに卒業式、そして入学シーズンも間近になりました。

第8号が出来上がったのでお届けします。学長はじめ、心よくご寄稿いただいた先生方に感謝しております。(K. Y.)

カット図；3D 日内地美樹さん